

## 学童保育指導員研修における講師活動の報告（２）

### —「児童への接し方（倫理道德面）」に関する講習（社会と子ども観の変化から）—

玉木 博章

愛知みずほ大学(非常勤講師)

Hiroaki TAMAKI

Aichi Mizuho College (Part-time lecturer)

キーワード： 指導方法; 社会変容; 学童保育; 子ども観; 倫理

#### 1、はじめに

筆者は 2015 年より学童保育指導員研修の講師を毎年務めている。内容は主に地域別で開かれる年 1～2 回の学童保育指導員学校の講師と、年数回の学童保育指導員資格取得やキャリアアップに関わる講習の講師とに分けられる。本稿では 2017 年度に筆者が務めた第

34 回あいち学童保育研究集会、第 7 分科会での「学童保育の運営における学童保育指導員研修の必要性と課題」と、学童保育指導員研修での「児童への接し方（倫理道德面）」(150 分～240 分)の講師活動の内容を報告する。まずは表 1 に日程記録と詳細を示す。また表 2 は資料として配布している。

表 1 講師活動の日程と内容の詳細

日時	地域	テーマ	会場
3月4日	愛知県名古屋市	学童保育の運営における学童保育指導員研修の必要性と課題	金城学院大学
3月7日	愛知県半田市	児童への接し方（倫理道德面）	半田市役所

講義は両日ともに社会や時代背景の変化をベースにして、指導員あり方が変わらざるをえない点、だからこそ児童への接し方も旧時代とは変えなければいけない点を説明した。本稿では主に時代変化に関わる基本的な概念の変化を資料としてまとめている。

#### 2、講義内容

##### 2-1 時代の変化

社会学者の Z.バウマンをはじめ、A.ギデンズ、U.ベック、S.ラッシュュらが口を揃えて現代を 2 つの時代に分けている。日本でもいわゆる規制緩和が始まり、グローバル化のなかでバブル経済の破綻から立ち直ろうとする日本経団連が打ち出した「新時代の『日本的経営』や規制緩和等に影響され、日本もバウマンらが論じるように不安定で変化の生じやすい様相となった。それは、かつて経済が国内だけで循環していた鎌倉時代、元寇によって国内に動乱が生じ、勝ってはみたものの、以前のように御家人達に分配する領土を失くしてジリ貧状態になった幕府と、御恩と奉公の不成立を

嘆く御家人達の様相に類似しているように感じられよう。日本企業もグローバル企業と戦うため、労働者に質素節約を求めざるを得ない状況になった。そうした時代変化を項目別に分けると表 2 のようになるだろう。

ライフコースで例えるならば、目的地へ各駅停車の電車で行くか、車で行くかという違いで表現できよう。電車は乗っていればいいから楽であり、比較的定刻通り<sup>1</sup>ではあるが、自分一人のために存在するわけではないので何かと不自由である。対して車は自ら運転するため自由度は高いが、疲労もあり、事故や渋滞のリスクもある。

また昔は、生まれ育った既存の共同体内だけで生活するため、一定の技能を身に付けさえすればお金を稼いで生活するには問題はなかった。しかしながら人の移動に伴い、商売敵が共同体内に移動して来る可能性もあるし、あるいは自分が移動するため、高い知性や技能が必要とされる。そしてそれは日本という枠組みで見ても同様であろう。かつては日本国内だけで経済が循環し、競合する労働者や企業も日本国内のみに

存在していた。しかしながら現在は、海外から日本に利益を求めて訪れる企業や労働者が増え、日本全体は

そうした競争に勝つため、いっそう知性や能力を求められるようになった。

表2 社会変容に関わる様々な事象の変化

個体的近代	項目	液状的近代
神、宗教、伝統、親	生き方の指針	自分
親、親方	ロールモデル	無い
狭い、村	生活圏、活動範囲	広い、世界中
少ない	接する人	多い
少ない、遅い	移動量、速度	多い、速い
緩やか	文化、流行の変遷や発展	早い、突発的
一定	ライフコース	多様
年齢、就職、結婚	大人	曖昧
未完成なもの	子ども	無限の可能性を秘めたもの
終身雇用	働き方	転職、中途採用、解雇が当然
すべきもの、周囲の援助有り	結婚、就職	個人の意思と力量
夫に従う	夫婦の姓	自由選択
よくないもの、避けるもの	離婚	個人の意思であり、ありえること
拡大家族	家族形態	核家族
共同体、親族、家族	子育ての責任	家庭、夫婦、個人
決まっている	フツウの人間	決まっていない
尊重されず、不自由	個人の意思	尊重され、自由
一樣	幸せの形	多様
従うべき絶対的なもの	魔法、宗教	合理性を欠いた非科学的なもの
少ない、想定内	リスク、トラブル	多い、想定外
与えられるもの	アイデンティティ	獲得するもの
ゴール有り	教育	ゴール無し
一定レベルの習得で完成	知性や能力	より高く必要とされ、完成がない
ルールに乗せる	教師の仕事	未知の未来への知識と思考を育む
共同体	責任の所在や行動単位	個人
歴史的伝統的な型への一致	指導の方法	過去を疑い、対象の意思を尊重
安定	社会様相	不安定

他方で、そうしたグローバル化の波に乗ることが不可能な非知性的で、一定の能力を持ち合わせない者は、いっそうローカル化して地元を出られなくなっていく。それだけでなく、人間関係は固定化し、またアイデンティティを獲得できていないため出身地域や中学に拘ったり、また異性との関係で埋めようとしたり、女性であれば配偶者となる男性姓への改姓することを願い、それを自らのアイデンティティと捉える傾向もある。つまりルネサンスから啓蒙主義へと変わっていった流れに始まる、神という絶対的な存在から解放（脱魔術化）がなされたにも拘わらず、現代に訪れた不安から再び何か絶対的なものに依存しようとしている（再魔術化）。したがって、現代はそうしたグローバル化できる者とローカル化せざるをえない者が存在するという

2極化した様相にあると言えよう。実際、バウマンはこうした状況に対して、グローバルエリート、ミドルクラス、アンダークラスの3つに分け、本気で行われえる陰湿な椅子取りゲームと揶揄している。また、G. ピースタはそうした状況の中で、アンダークラスへの転落を恐れるミドルクラスが教育熱を持っている点をミドルクラス不安と形容している。

## 2-2 現代に見受けられる指導の齟齬

このような現状を俯瞰した時に、子どもへの指導方法にはどのような変化が生まれ、どのような配慮が必要なのだろうか。特に現代では、大人の型が一定ではなく、子どもは大人達が体験したことのない未知の世界を生きていくことになる。したがって、大人達が経

験していたものをそのまま取り入れただけでは、有益とは考えづらい。なぜならば、変化の早い現代では以前に巧くいった方法がそのまま巧くいくとは限らないからだ。これらのことを踏まえれば、想定される懸念は2点浮上してくる。

1 点目は、こうした時代や子ども観の変化を知らずに、自らが学んだ方法を良きものとして再生産してしまうことだ。もちろん、そうしたプラグマティックな学びが全て悪いわけではない。しかしながら、科学や医学は日々進歩している。例えば鼻血の対応は、昔なら首の後ろをトントンしていただろうし、野球の投手が投げ終わった後は肩を冷やしてはいけないとされていた。だが、それらは現代では間違いであることがわかり、実践されない。投手はすぐにアイシングする。他方でしつけのためにと容認されていた体罰も、現代では虐待に当たる。また発達障害やセクシャルマイノリティも認められ始め、いわゆる「フツウ」や多数派が正しいという考え方も変わってきた<sup>2</sup>。つまり全体性よりも個が重んじられ、人と違うことが、将来的にはその子どものストロングポイントになることもある。みんなと同じことができるのは確かに大切だが、同じことができないのであれば、それで生きていくためにはどうしたらいいか、そしてその違いを生かす方法はないのか模索すべきであろう。したがって、平成も終わろうとしているのに、未だに古き良きとされる昭和の考え方に囚われた子ども観や指導法を続けていないか、指導員自らが確認をする必要がある。慣習であるから、みんなやってきたから、自分はこうだったから、といった伝統を重んじる日本人特有の考え方が、知らず知らずのうちに子ども達を傷つけている可能性もあろう。

他方で、懸念されるもう1つの視点は、時代変化についてゆけず、合理的で高い知性を欠いているローカル化された個人が、根性論や感情論を子どもに押し付けることであろう。場合によっては自らの社会や家庭での不満やストレスを、指導という名目で子どもにぶつけて、自らの優位性を証明しようという愚か者も存在するかもしれない。だがそんなことは以ての外であろう。そのような行為は虐待である。指導員は子どものために存在し、究極的にはその仕事で給料を貰っている。子どもを自分の自己肯定感を向上させるための道具として用いるような者は、指導員として不適格であり、全ての行為は子どもにとって有益なもの、そして納得のいくものでなければならない。即刻改善し、改善できなければ辞めるか、辞めさせることも、管理者には求められる。なぜならば、問題が起きてからでは遅く、辞めさせるよりもいっそう不利益なことが生じるリスクを孕んでいる。管理者は近視眼的ではなく、

長期的な視点が必要であることを自覚すべきであろう。

## 2-3 現代に求められる「中断の教育学」

これらのことを踏まえれば、既存の方法論や考え方に準拠するのではなく、目の前の子どもの様子を理解し、その子に合わせて対話的に接していることが必要となるだろう。また雇用形態が柔軟になり、リストラや転職が当然になった現代では、1つのことを極めるというよりも、多様なことに取り組みながら、自分のできることを発見していくことが求められるため、与えられた経験に順応することも大切ではあるが、主体的に経験を選択していくことの方が重要になる。そうすることで、これらから訪れる未知の社会への対応力を養わなければならない。最早、大人の言う通りに生きていても幸せになれるとは限らない。大人が過ごした頃とは社会の様相は変わり「ゲームばかりしていたら生活できない」という言葉でさえ、eスポーツが盛んになった現代では効力は持たない。そしてその鍵になるのが、「中断の教育学」という考え方である。

中断の教育学とは、教育学者 G. ビースタの中心概念である。一見すると、中断の教育学とは、教師が何らかの方法で生徒の活動を遮ることに関与すべきだと捉えられ、奇妙に感じられる(ビースタ 2016, 110)。しかしビースタによれば、新参者つまり新たな意見を持った人が、既存の社会的、文化的、政治的な秩序にはめ込まれる時に、彼ら何らかの方法でそのような秩序からの独立も手に入れるという筋道が無いのならば、教育は非教育的になる(ビースタ 2016, 111)とされる。つまり、新参者が存在できる空間や場所を用意することが教育的な応答責任であり、正常であるとされる秩序に対しても、それを中断する可能性を開き続けることが中断の教育学である(ビースタ 2016, 133-134)。敷衍して言えば、価値を絶対的に固定せず、どんなに道徳的で良いとされるものに対しても絶えず議論の余地を残すことを含意する。

例えばビースタは教育の機能は資格化(知識、技能、理解の獲得)、社会化(特定の秩序への一致)、主体化(秩序からの独立)の側面にあると言う(ビースタ 2016, 35-37)。ビースタは、教育学とは、これら3つの機能に重複し、個別的領域よりもむしろ諸領域をまたぐ(ビースタ 2016, 38)ものであると述べる。だが教育とは常に人間の自由にも関心持つべきであり、だからこそ教育の主体化の次元の重要性を強調している(ビースタ 2016, 112)。したがって自由とは定義された時点で自由ではなくなるし、こうすれば主体化するというテンプレートのような方法論に則っていたのでは主体化しているとは言えない。したがって中断の教育学とは、特定の教育学に保証された成果になりうる

何かではない（ビースタ 2016, 133）。その居場所を主体化の領域に持つのであって、資格化や社会化の領域にではない（ビースタ 2016, 134）。主体化の間に向き合い、成果を保証できないという教育の根本的な弱さを承認する教育学なのである（ビースタ 2016, 134）。

#### 2-4 ミステリーを生き抜く主体性を育てる試み

これらの概念を敷衍すれば、何を望ましいとするかも子どもの実態によって様々あることがわかる。型にハマって大人の意のままに動くようになるのではなく、その子が主体的に行動できる接し方が必要となる。そしてその方法を、指導員自身が、変わり続けるこの社会の中で常にアップデートしていくことが不可欠となる。実際に、ビースタもこれからの世界についてパウマン（Bauman 1993, 33）を引用しながら「我々がまだ説明されていないだけではなく、（我々がこれから何かを知ることについて我々は知っているけれども）説明不可能な出来事や行動と共に生きることを学ぶ世界」（ビースタ 2016, 93）と描写する。コード化された道徳、つまり定式化された道徳が終わった現代において、過去に巧くいったことをまた別に当てはめることが必ずしも巧くいくとは限らない。過去の例は何が巧くいったかを我々に伝えることはできても、何が巧くいくかは伝えられない（ビースタ 2016, 64）。そもそも根本的に人はそれぞれ違う。それにも拘らずそうした接し方は、個人の違いを考慮しておらず、軍隊のように全員同じ行動を求めていることと同じであろう。つまりそれは秩序への同化であり、主体化とは言えない。ビースタは教育とは、工学的もしくは技術的な実践というよりむしろ道徳的な実践である（ビースタ 2016, 58）。

したがって教育においては、何が適切なかが問われるべき（ビースタ 2016, 58）でなければならない。例えば、親や指導員の求める良い子であることが当該児童にとって生きづらいことであるならば、本音を出してリラックスして生活する方が、人生をトータルで考えた時には、その子にとって主体的に生きることに繋がっていくことになるだろう。したがって、闇雲に大人にとっての「よい」を押し付けてしまわないように、指導員は自らを相対化して児童に接していくことを心がけるべきだと言えよう。

### 3、おわりに

本稿では学童保育指導に対する「児童への接し方（倫理道徳面）」に関する講習の内容を示してきた。講習のサブタイトルとして「社会変容と子ども観の変化から」ということを意識して構成し、主に経済面や社会面での変容が根幹にあることを基にこうした変化に

ついて講習を行った。そしてだからこそ、完成形を求めず、常に指導の方針を子どもとすり合わせながらアップデートしていくことが重要であることを述べた。だが、こうした変化を呼び起こした他の理由として、平均余命の変化も、最後に指摘しておきたい。

医療の進歩によって、日本の平均余命は飛躍的に伸びた。還暦を迎える前に多くの人が亡くなっていた時代があったことを考えると、人生 100 年時代と呼ばれる現代は、そうした昔とは全く違う生き方が求められるようになったことだろう。人生が 50 年であれば、自分の孫に会う可能性も減少し、自分の子どもでさえ育て切ることとはそもそも不可能であるといった発想であったかもしれない。だからこそ、そうした現状を割り切り、なるべく早く自己像の完成形へ近づき、それによって豊かな生活をしようとする目論んでいたのかもしれない。仮に、大学に入るために何浪もするとか、何もせずに一生ブラブラしているという時間の使い方をしていればすぐに寿命がきてしまうだろう。だからこそ昔は、時間や社会の流れは緩やかでも、何かにならなければと自負し、人生自体を現代より生き急いでいたのかもしれない。翻って変化が速いにも拘らず長く続く現代の人生では、その目まぐるしさと長さから、眼前で生じている現象に対して意味を見出ししていくことが困難になり、自らの価値を見つけられず、引きこもり、不登校、自傷といったアクティングインが生じているのかもしれない。

だがいずれにせよ、こうした社会変容が生じている現状を理解して子どもの指導にあたり、自己研鑽を積んでいくことが求められる。現代はミステリーである。したがって指導者自身が子ども達からも学び、自らミステリーに対応していくこと、そしてミステリーであることを子どもに伝えながら、そのような現代を生き抜ける主体性を形成する指導をすることが求められる。

#### 参考文献

- A.ギデンズ（1993）. 松尾精文, 小幡正敏訳. 近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結. 而立書房.
- A.ギデンズ（1995）. 松尾精文, 松川昭子訳. 親密性の 変容—近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム—. 而立書房.
- A.ギデンズ, U.ベック, S.ラッシュ（1997）. 松尾精文, 小幡正敏, 叶堂隆三訳. 再帰的近代化—近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理—. 而立書房.
- A.ギデンズ（2005）. 秋吉美都, 安藤太郎, 筒井淳也訳. モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会. ハーベスト社.
- U.ベック（1998）. 東廉, 伊藤美登里訳. 危険社会 新しい近代への道. 法政大学出版局.

上森さくら(2018). インクルーシブな社会へつなげる自治的活動の要点. 全国生活指導研究協議会. 生活指導, 738号(6月7月号). 高文研. 58-65.

U.Beck (2001). Individualization. SAGE Publications.

荻上チキ, 内田良(2018). ブラック校則 理不尽な苦しみの現実. 東洋館出版.

学童保育指導員研修テキスト編集委員会(2013). 学童保育指導員のための研修テキスト. かもがわ出版.

G.ピースタ(2016). 藤井啓之, 玉木博章訳. よい教育とはなにかー倫理・政治・民主主義. 白澤社.

Z.Bauman(1993). Postmodern Ethics. Blackwell.

Z.バウマン(2001). 森田典正訳, リキッド・モダンティ―液状化する社会―. 大月書店.

Z.バウマン(2002). 中道寿一訳. 政治の発見. 日本経済評論社.

Z.バウマン(2007). 伊藤茂訳. アイデンティティ. 日本経済評論社.

Z.バウマン(2007). 奥井智之訳. コミュニティ―安全と自由の戦場. 筑摩書房.

Z.バウマン(2008). 長谷川啓介訳. リキッドライフ―現代における生の諸相. 大月書店.

玉木博章(2015). 今、学習すべき民主主義, 民主主義を学習する―教育・生涯教育・シティズンシップ(G.ピースタ著), 読書案内. 全国生活指導研究協議会. 生活指導, 728号(2月3月号). 高文研. 76-77.

玉木博章(2016). キャリア教育の生成と展開における考察(1)―政策方針の検討による教育方法への手がかり―. 中京大学国際教養学部. 中京大学教師教育論叢. 第6巻. 191-208.

玉木博章(2017). 「振り返り」活動の指導に関する考察(1)―特別活動実践における重要性と道徳性の観点から―中京大学国際教養学部. 中京大学教師教育論叢. 第7巻. 49-64.

玉木博章(2018). 学校教育の商品化による教育実践の変化に関する考察―特別活動における道徳性の側面から―. 名古屋経済大学. 教職支援室報, Vol.1, No.1. 45-53.

藤井啓之(2016). 訳者解説―ピースタを通して見る日本の教育風景. G.ピースタ著. 藤井啓之, 玉木博章訳. よい教育とはなにかー倫理・政治・民主主義. 白澤社. 199-205.

藤井啓之(2016). 表情を持ち始めた中学生～仮面がなくても居られる学校に～. 生活指導, 724号. 高文研. 38-41.

藤井啓之(2017). PDCAからPDSAへ 教師にも子どもにも表情のある教育を. 教育科学研究会編集. 教育, 2017年, 2月号. かもがわ出版. 59-64.

本田由紀(2005). 多元化する「能力」と日本社会―ハイパー・メリトクラシー化のなかで. NTT出版.

M.ウェーバー(1989). 大塚久雄訳. プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神. 岩波書店.

松下良平(2011). 道徳教育はホントに道徳的か? 「生きづらさ」の背景を探る. 日本図書センター.

山下政俊, 湯浅恭正(2012). 新しい時代の教育方法. ミネルヴァ書房.

山本敏郎, 藤井啓之, 高橋英児, 福田敦志(2014). 新しい時代の生活指導. 有斐閣アルマ.

注)

<sup>1</sup> 列車を共通項として昔と今に対する意識の例を挙げれば、昔の列車は比較的定刻通りであったが、流動的な今では列車すらダイヤが乱れることもある。このことを地域差に敷衍できる。東京の列車のダイヤは乱れやすく「遅れるのが当たり前」と在京の人々はそうしたリスクを地方の人々よりも許容していよう。ここにもローカルに生きる人間とグローバルに生きる人のリスク意識の違いが見て取れる。

<sup>2</sup> 逆に「お年寄りを大切にする」という考え方も、国、地域、時代が変われば「姥捨て山」のような事例もあるように揺らいでいく。また極端な例だが、戦争を肯定し、アメリカ人を「鬼畜米英」と呼んでいた時代もあった。フリーターですら、その言葉が生まれた当時は「夢追い人」としてはやされていたよう

に、時代が変われば「よい」とされる価値観が変わっていく。加えて、結婚の方法に見受けられるように人間が持つ時代ごとの先入観によって「フツウ」のあり方も変遷する。例えばかつては親同士が家の繋がりや恣意的に結婚を決めた時代、また集団結婚によって見知らぬ人と突然結婚することもあった。それが職場結婚やお見合い結婚といった個人の意思が反映される形になり、現代では敢えて職場等の近い場所では出会わず、コミュニティの異なる相手や、マッチングアプリで知り得た相手と結婚するケースも増えてきた。そしてそもそも結婚をすることは個人の自由である。いずれのケースも時代が異なれば、互いに異様に感じられるであろうが、それも全て人々の中に「フツウ」に対する先入観が存在しているからであろう。